新原本人

熊

転生を繰り返すとも逢いに行く 一千百千万億兆京

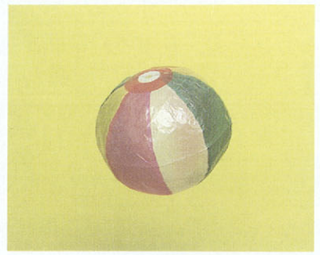
歌人・浜名理香

昭和38年6月　熊本県生まれ
昭和58年8月　「牙」短歌会入会
昭和59年4月　「未来」短歌会入会
昭和62年1月　処女歌集「銀のノブ」出版。
昭和62年3月　熊本大学文学部文学科卒業
現在　熊本高校非常勤講師

人間の一生は、風の前の紙風船のごとく、どっちに転がって行くか定かではない。私にとっての短歌も、運命の風か、吹いた風に従って転がって行ったぐれの風か、吹いた風に従って転がって行った先にあった偶然の道なのである。

高校を卒業してすぐの春、歌人の石田比呂志と阿木津英とに出会った。石田庵は文学を志す青少年の唯一の拠所として存在していて、私の兄も、そこに出入りする青年の一人であった。ある日、兄が私のことを吹聴したらしく、「そんならいっぺん会わせてみろ」ということになった。ところでこの両氏、生まれは福岡県である。十年ほど前、うれしはずかしの駈落ちなるものを実行しなければ、この地に住まうことなく、従ってその日の私の出会いもなかったはずである。

さて、開口一番、両氏は「これがお前の妹か！これはハチガメ（福岡田舎方言にて兜蟹の意　ブスの代名詞）じゃないか」とのたもうた。もう少しで怒って帰るところだったけれど、その後で一万円もする中華料理を御馳走になり、胃袋が腹の虫をなだめてくれた。おまけに、「女は赤ン坊を生んだくらいで満足するな」とか、「親の言うことは聞かなくてよろしい」と、オイシイ言葉を目前に垂らされ、歌のためなら炉辺の幸を捨て去っても厭わな



仏具屋の軒の下にて観音が頭に値段貼られて立てり

かかる夜は透明人間掌（てのひら）に己がたましい包みて眠る

所有するものにあらざる感じにて ある夜乳房を見おろしている

いという純真にうたれてしまった。人の一生を賭けて悔いのないものならば、私もやってもいいなァと漫然と思っていた。

けれども、その時はそれまでで、私は一年間、予備校へ通う身となった。その一年で、文学部志望だった男の子が、入試が近づくにつれ、算盤玉弾いて法学部や教育学部に鞍替えして行くのを見て、〈あわれなるもの汝の名は男なり〉と思ったのだった。単なる皮算用で測った幸せを得るために、自分のやりたいことを捨てて行く単純に対し、そういう世界へ取り込む、目に見えない何かに対し、復讐

花電車過ぎゆきしのち銀（しろがね）のレールが雨を弾きはじめつ

胃弱なりし漱石先生鼻ひげを撫でつつ那古井の湯に沈みしか

祖父（おおちち）の歯のなき口につつましく受身の桃が食われてゆけり